

## 水環境・微量化学物質(2) (3-A-10-4～3-A-12-1)

本セッションでは水環境における微量化学物質について、6編の発表が行われた。河川におけるエストロゲン類似物質の挙動(3-A-10-4)では、淀川水系河川水について、エストロゲン受容体試験及びYES試験により、エストロゲン類似活性を求め、E2、BPA、及びp-NP以外のエストロゲン類似活性物質の存在があることを報告した。環境中のエストロゲン類似活性物質については、まだ、不明な部分が多く、今後、様々な研究の積み重ねにより、その挙動が明らかにされることが望ましい。フミン質共存下におけるエストロゲンの吸着(3-A-11-1)では、各エストロゲン物質の活性炭に対する吸着速度及びフミン質共存下では競合吸着することについての報告があった。環境中に存在するフミン質については、様々な化学物質との相互作用があることが知られているが、フミン質共存下における吸着特性等の研究は実際の処理のための重要なデータを提供すると思われる。LC-MSを用いた水道原水中の農薬の調査(3-A-11-2)では、各農薬の検出率の季節変動、浄水処理による減少、オキソンの浄水処理による生成についての報告があった。水田流域の農業排水路及び浅層地下水(3-A-11-3)では、水田施用農薬の地下水・伏流水に与える影響について報告があった。地下水の検出と、排水路の濃度、降雨量及び地下水位との関係については、明確なものが得られなかったが、さらに調査を進めることによってより詳細なことをあきらかにするということがあった。また、(3-A-11-4)から(3-A-12-1)にかけて、琵琶湖流域への水田施用農薬の流出についての報告があった。農薬の河川環境への流出についての研究はここ何年も発表件数が多い。いずれも、濃度や負荷量の散布時期及び降雨量との関係について述べているが、流出特性は、各農薬の物性や施用法にも影響されるということが示された。

(神奈川県環境科学センター 三島 聡子)